新宗教セミナー

教化の問題点

――妙智会の場合――

小林永司
（妙智会理事）

日蓮宗と私、日蓮宗の方から見ると悪縁かもしれませんが、どうも、縁が深うございます。

私は、昭和三十九年までジャーナリストで、初めに、私自身の立場を申し上げないと、お話の背景もおわかりにくいと思いますので、申し上げるんですが、私が宗教界、日蓮宗、それから妙智会にかかわり合ってきた入口と申しますのは、復員してまいりまして、昭和二十五年に、東京日日新聞が出していた「週刊東日」の新聞記者をしておりました。昭和二十五、六年でしたか、その特集は、新興宗教をやろうということで、何とかという新興宗教が中野本町にでき、毎日のさい銭のあがりをさばくのにこまって、銀行がついにその町に進出したという評判だから、「その新興宗教を調べてこい」と編集局長からいわれました。行ってみたら、今の立正佼成会でした。まず私は、信者になってもぐりこみまして一週間。やめた会員や信者をたずねて一週間。熱狂的な信者を一週間たずねまわりまして、なぜこういう新興宗教が繁盛しているんだというルポとその批判を書いたわけです。それが評判になりまして、次にＰＬ教団、それから当時メシヤ教といっていた、いまは世界救世教ですね。初代の岡田茂吉さんが教祖でいらした頃。「浄霊で病気がなおるもんか」などと言って議論をふっかけに行ったりしまして、いろいろルポを書いたわけです。そうしましたら、当時、新日本宗教団体連合会（新宗連）というのが曹洞宗出身の大石秀典先生の手で作られようとしている

時だったんです。悪口ばかり書くので、蛇蝎のごとく嫌われまして、どこに会いにいっても会ってくれません。いわゆるスキャンダル専門の記者になったわけですね。

ところが不思議なことに、日蓮宗に加藤正見という方がいらっしゃいまして、その方が私を会社にたずねて来まして、「あんたが宗教のことを書いてんのか」「そうです」「おもしろいネタやろう。身延の久遠寺と佼成会がケンカをはじめたから書いたらどうだ」と。これはおもしろいことを聞いたなと思って聞きましたら、まあ立正佼成会が大勢団体をひきつれて久遠寺に参拝して納めるご開帳料のことで、ケンカになった。それを一応取材しまして、私も宗教法人その他無知でございましたので、日蓮宗の総本山が立正佼成会を破門したと間違って書いてしまった。破門も入門もないわけで、それぞれが独立した宗教法人でございますから、すでに宗教法人法というのが施行されてございましたし、それを私が間違って書いてしまって、佼成会から文句がきました。それから身延の方に問合わせたら、実はあの件はもうすんだといわれて、私が恥をかかされたといういきさつがあるんです。

今考えますと、要するに伝統仏教と新興宗教のせめぎ合いのひとつの形じゃなかったのかと思いますね。率直に申し上げて、片っ方は日蓮宗の総本山という権威、伝統をバックにしている。片方は教義体系もたいしたことなく、ただその組織力とか宣伝力が上手だということで、信者大衆を集めている。いわば当時はやっていた新興宗教という言葉は、戦後の混乱期にできました新興財閥・新興成金、たとえば八百屋とか魚屋のむすこむすめが学習院に行くとあれは新興成金だという、つまり戦争中の身分体系というものがこわされまして、戦後の輸入した民主主義がまだゴチャゴチャ渦まいている時に、現われてきている社会現象であります。当時の新聞や週刊誌をみてわかるように、新興宗教に対して、雨後の竹の子のごとくという表現がたくさん使われております。とにかく次から次へと宗教だと名のるものが出て来ている。

この新興宗教というのはどういう意味か、今は新興宗教といっておりますが、新宗教の定義とはどういうものか。

新興宗教とか、新宗教というのは、別に意味はなくて、鎌倉時代、仏教八宗の中から道元・日蓮・親鸞という方々が出て来た時にも、やっぱり新宗教であった。カソリックに対してプロテスタント、そのプロテスタントもいろんな派閥になっていく。宗教の発展とはそういうものじゃないだろうかということが、今日常識になっています。戦後、いろんな宗教が出てきたことを非常に侮蔑的に取りあげるという社会風潮でした。これは無理ないと思うんです。明治以来の国家神道を中心にした政府の権力者による宗教統制、特に戦争中の宗教団体法の施行によって、完全に宗教統制の時代に入った。天理教では、無残な弾圧を受け、ほんみち教団も残酷な弾圧をくぐりぬけてきました。戦後、進駐軍の神道指令によって信教の自由というものがもたらされた。明治欽定憲法の二十八条の信教の自由はうそっぱちでございまして、これは、国家の安寧秩序というものを乱さない限り、臣民の義務にそむかないかぎりという条件つきの信教の自由であったわけですね。それがいっぺんに解放され、我も我もと宗教の名のりを上げて来たというふうに解釈してもよろしいのですが、実は今、私どもの仲間である、新日本宗教団体連合会の中には、戦後発生したとか、出発したとかいう形はとっておりますが、戦前、今言ったような宗教統制のもとでは、独立しようにも独立できなかった。そういう団体は、戦前から活動はしてきたけれども、宗教とは認めない。宗教ではなく単なる結社としている。さらにその下の淫祠邪教としてあつかわれてきた。そういう差別の中で生きて来た宗教者の方々が、戦後信教の自由を保障されて息をふきかえした。

実は、これにはおもしろいお話がございましてね。私、信教の自由を守るという委員会の委員をやっておりまして、新宗連の加盟教団の学習会の中で靖国問題を説いてまわっているんですが、ある所で勉強しましたところ、戦後、新宗教と称するものはものすごい勢いで伸びたわけですよ。これはどういう理由かといういろんな解剖がなされ、中濃教篤先生編の『新興宗教の解剖』(昭和二十九年刊)、は、的確に当時の状況を書いてございます。その他、たくさんの批判書が出ております。そういう批判書が触れてもおらず、我々も知らなかった事例で、こういうお話があったんで

す。

東北へ行きましたら、ある地方の教団の幹部の方が、私の話を聞きまして、「戦後もたらされた信教の自由でうちの教団も伸びたけれども、例えば、法華経系ですと、〝みちびき〟とか、〝おみちびき〟とか、〝おつたえ〟という言葉を使いますが、入会の勧誘に行きますと、そこにいる人たちが私たちが自分で信仰を選んでいいんですか、という問いがあった」と。靖国の問題を話すときに、よく歌われる「九段の母」、ひざまずいておもわずお念仏を唱えようとして、「せがれ、ゆるせよ」、田舎者だと老母があやまる。自宅へ帰れば、仏壇に阿弥陀様や先祖をまつって日夜南無阿弥陀仏と唱えるお母さんが、自分のむすこの霊に会いに来ているのに靖国では南無阿弥陀仏と言えないという。この状況ですね、婦人雑誌の懸賞歌にも戦争中の宗教統制があらわれています。

そこへ信教の自由というものが保障されて、いろんな教団、いろんな宗教者が、言葉は悪いんですが、勝手気ままというか、自由自在にのびのびと自分の信ずるものを主張し、プロパガンタの自由を行使してゆく。国家が指示する宗教以外に、自由に選択できる喜びの中で、新宗教に入って来ている。といった状況があった。だから、新興宗教とか、新宗教とか呼ばれるものが、カリスマ的な指導者がうんと偉かったとか、その組織の仕方がうまかったとか、啓蒙の仕方が近代的であったとかいわれることとは別に、もう一つ大きな流れとして、今言ったように、抑圧された個々の民衆の信仰や信心というものが、信教の自由によって一拠に吹き出た。それを受け皿にしたのが、新興宗教、新宗教といわれるものじゃないかと、私は思うんでございます。

で、当時はそういうことですが、まず人が集まる、お金がたくさん集まり、そのために銀行ができるということを、私は取材したんです。

事実、行ってみてびっくりしました。とにかく閑古鳥が鳴いている古いお寺とちがって、活気がある、さい銭はある、建物はどんどんできてくる。私も初めは、民衆欺瞞の一つの形じゃないのかと思っていました。しかし、中に入っ

てやっていくうちにひょいと気がついたことは、社会思想の運動団体として見ていかなければ、なぜこういう膨大なエネルギーが集まっていくのかというところが解明できないんじゃないかということに気がついたわけです。そしたら、高木宏夫さんの『新興宗教』（岩波新書）という本にも、そういう切り口でなきゃ、これからだめだという批判が書かれてありまして、私としては、そういう社会現象としてアプローチして、そのリーダーの方々の話を聞いてみると、意外にも、非常に深い何か、宗教的情念というのをお持ちになっている。人格的にもうたれるという場面に出くわして、しだいにミイラとりがミイラになったわけなんです。

そこで、あの加藤正見という方、久遠寺と佼成会のトラブル云云を縁に仲よくなりまして、つき合っているうちに、「代々木に、ちょっとおもしろい教団があるから行ってみないか」と誘われたのが、昭和二十六年だったんです。で、そこに行きまして、宮本みつという人に会ったわけです。

妙智会は、麻布の霊友会の支部長だった宮本みつが昭和二十五年に独立して旗上げをした会です。俳優の早川雪洲さんが住むために設計したという日本家屋に、ご家族と四人で住んでいました。そこで集会をやるというまことに手狭な本部教会でありました。その教会で、初めて宮本みつ師に会いまして本当にびっくりしたんです。間尺に合わないという言葉がありますけれども、自分達の持っている常識とか、学問知識とかは、まったく合わない人がいるんだな、不思議なおばさんだな、というのが第一印象でございました。で、なんとなく、そこだけは悪口が書けなくてつき合っているうちに、これも縁でございましょうか、赤新聞や右翼団体などがきて、新宗教は金があるからというので、寄付しろとか、これを買えとかいわれて困っているんだという相談を受けたんです。それからは、いろんなインチキ新聞雑誌などの撃退役を、私引き受けましてね、いちいち口頭で説明してもダメだから、この会はどういう会なのかというパンフレットなんかを出したらどうだと説明しましたら、それはグッドアイデアだということになりました。そこで、「あんた書いてくれ」と、こうなってしまった。「妙智への道」というものを書いたんです。私何にも知

りませんので、どうして妙智会ができたかというお話を聞きました。

この時に私、夜行列車に乗って身延の団参に参加しまして、いわゆる新宗連の法華経系の教団が、どういう形で、どんな内容で身延山にお参りし、奥の院にお参りし、七面山にも行くのかということを、一緒に行動してつぶさにみたんです。そこで驚いたのは、あのカリスマ的な存在である教祖に対する恋慕というか、寄り添い方がまことに強烈であるということでした。まだ私は新聞記者の悪いクセがぬけてませんから、意地悪くこの教祖一家を常にながめていたんですが、裏から見ても表から見ても、この宮本みつという女性はすばらしい修行者だということがわかってきたわけです。とにかく粗衣粗食。仏教に貪・瞋・痴という三毒の話がありますが、怒った顔を全然見たことがない。おおらかである。私、だんだんに人格に引かれていきましてね。みなさんが会長先生といって拝んでいた時に、私のような暴れん坊が面とむかっておばあさんとかおばちゃんと言っても、ちっとも怒らないで、いろんな話をしてくれた。そういうことで、江戸末期あるいは明治・大正・昭和の時代に、いろんな宗教が出て来ましたけれども、開祖・教祖というものはどんな苦労をするんだろうかということを、私は現実にそこで見さしていただいたわけですね。

今でも語り草になっていますが、この宮本家というのは、一切を信仰のために解放して、自分自身がなかったということを、古い信者達は知っております。新宗教の当初の形というのは、シャーマン的なカリスマが出て、多少は呪術的な教義内容かも知れないけれども、非常に強烈な人格的な影響を与えます。妙智会が開教された時に集まった人数が一八五人といいます。現在は公称七十万、実際、強力動員できるのは、三十五万ぐらいでしょうか。わずか四十年足らずでこれだけの信徒数を獲得し、施設が大きくなりました。

私が妙智会に触れあった頃は、いずれの新宗教も市民権を得る、認めてもらおうということで非常に四苦八苦している時でしたね。ですから政治との関わりあいなんかでも、非常に迎合的でありました。なにか式典行事があると、政治家を呼んで箔をつけて内外にデモッていくというくせがございましてね。今はもうほとんど新宗連加盟の大きい

教団では、総理大臣から電報が来ても紹介しないというぐらい気位が高くなっておりますが、政教分離ということもありまして、それに意識が深まりましたために、政治とは適当な距離をおくといった傾向にあります。当時は、代議士ならだれでもひな壇に座ってもらって権威づけをしようとしました。ちょっとあさましい状況はありましたですね、ザックバランに言って。新宗連ができて、お互いに情報交換がスムーズにいくようになり、いろんな社会的な対策もみんなでやれるようになってから、ある意味では、非常に珍らしい親睦団体というふうに成長してきたわけです。

私がこんな話をしているのは、ひとつは戦後生まれた貧しい教団が、どのようにして発展してきたかをご理解いただきたいからです。

まず最初に、そこにあったのは熱烈な信仰心であり、使命感といいますか、伝統仏教のようにプロではございませんで、仕事をしながら信仰活動をしていく、自分自身の革新を図ると同時に、他者への語りかけをしていかなきゃならないというムーブメント、運動面があったわけで、この運動面が非常に強烈だった。ねずみ算式に信者を増やすから、新宗教は伸びるんだと言われておりますが、そういうねずみ算式で増えていく根底には、一人一人が布教者という自覚があったんだということです。一人一人が自分の受けた教えは他者に伝えていくという仕組みなんです。しかもそれは非常に狂信的ともいえる熱烈さがありました。命がけ、法華経には、「不自惜身命」という言葉がありますが、文字どおり命がけで、「この教えのためなら」「この人のためならば」という雰囲気は、たしかに昭和三十年前後ございましてですね。これは、あの当時の映画の記録を見ますと、実によくわかる。教祖の説法を聞いている人の表情、目の輝き、姿勢、これが磨きあげられた信者の姿でした。歩き方から違う。だから「一気呵成」という言葉がありますが、実際に当時はそうだったんですね。その頃は、教祖のカリスマ的な人格の影響が大きかった。その影響を受けて、幹部が教えというものを背負って全国に散っていく。妙智会の場合は、東京の本部が中心でございますが、一人の人間が本部から教えの種をもって地方へ帰って兄弟に伝え、そこから周辺へ広がっていく。たった一人の動き

から信者が増える、その伝道の仕方というのか――いかにその一粒の動きがさらに種を広げていくかということを、私、知らされました。

その運動体としての熱烈な広がりを見せている間に、今度は中間的組織体が出て参ります。オーガニゼイションと言いますがね。教祖を中心にして幹部が配置されて、口コミや月一回の機関紙会報で伝達するという方法でやってました。私が妙智会に出入りして十五年ぐらいたってから尋ねてみましたら、少数幹部の口コミだけではダメだ、月一、二回の連絡だけではダメだという、ちょうど極限状況になっていましてね、季刊でもいい、月刊でもいい、一切まかせるから、ひとつ雑誌を出して欲しいといわれたんです。教団は、雑誌というコミュニケーションの媒体を必要とするところまで成長したわけです。

で、その時には、組織体としては、教会や道場、その他の地方拠点がかなり出来てきている。ただ制度的ではなく、行政先行ということでなくて、わかりやすく言えば、うんと売り上げを伸ばして、総務関係は後でいいやという空気がありました。ちょうどこの展開期に、妙智会のPR編集関係、文章活動面で仕事をしてくれということで、私は引き受けて入ったわけなんです。そこで始まったのが、教義の整備なんです。昭和三十年代に、新興宗教とか新宗教は低俗なんだという批判が出てまいりました。その低俗の原因として、シャーマン的であり、呪術的であって、しっかりした教義がない、理論も持ってないんじゃないかということでした。こういう批判が絶えずおこなわれたんですね。信者という大衆に接してみて、最初は私の話は全然受け入れられなかったんです。相手の心に入ってかない。ナゼかなと思った。そしたら、理事長(現在の会長)から、「あんたは頭で話している」と言われました。で、布教をしていない私に、千名とか、五百名参加の布教所へ行って話してみろという。私が偉そうな事をいろいろと書いているものですから、今度はコイツに話をさせてみようっていうんで、昭和四十年代の初めから私をその大衆の中にぶち込んで話をさせられたら、これは、今でも夢に見るくらい、恐怖に満ちた、ふできな「説法」でした。山形でしたが、千名以

上の信者の前で、「さあ、話せ」といわれても、何を話したんだか全然わからない。後で、古い支部長から、「おめえ、あん時はヒデエものだった」と言われましたけれども、何を言ったかわからない。なるほど、法を説くということは、日蓮様がこういう方で、会長先生がこういう方で、法華経がこうで、だからみんなこうしなきゃいけないんだと、知識で説いたって、絶対ダメだということが、嫌になるほど実感しました。

それから三十人、五十人、六十人の法座所を回って話をしてみても、私の話は聞いているんだけどで、信者は近づいて来ませんでしたですね。で、「なぜか」と聞きましたら、「話が終わってさっさと帰ってしまうからダメだ」とこういうんです。「一緒にメシ食え、オマンマ食え」という。食事をすると、「話すべ」と、コタツへ入るわけです。夜のおそくまで、自分家のこと、孫のことなどを、お婆ちゃんやおじいちゃんがする。結局何ということはない「おめえにただ話したかっただけだ」という。帰って来て、「こういう状況でした」と報告したら、「あんた、いい布教やって来たな」といわれました。布教とは一方的にしゃべることなのかと思ったら、そうじゃなくて、「相手の話を聞くことが、布教なんだよ」といわれて勉強しましたね。

新宗教のエネルギーっていうのは、こういう所にあるんだなあと思いました。だから、絶対にレクチャー（講義）はいけないんだという。その目的は何であるかといったら、あくまでも「救い」なんでね。救いの業（わざ）をなしていく。社会の中で、救いの働きをするものが、宗教団体なんだということを教えられたわけです。山にこもったり、社会から隔絶された所で自己の宗教的向上を目指すということも信仰かも知れませんが、私どもの解釈は、社会の中にどんどん救いの働きを伸ばして行くというのが、根底にある。

余談になりますが、京都で例の税金問題が起きた時、京都のある僧院の方が私の所へみえられて、意見を言えというから、私は、「寺から出て、山門でいいから、毎日交代で、僧侶の方が墨ぞめの衣をつけて合掌して観光客を迎えたらいかがでしょう。まず、来る方を拝まなければしょうがないでしょう」といったことがあります。これが、やはり

宗教者の根本じゃないでしょうか。たとえ妙智会の事務所に会員が入って来た時に、背を向けていたら、だいたい二時間ぐらいしぼられます。「仏様の遣わしてくれた信者に対して尻を向けた」といって。「それでも妙智会の信仰者か」といって。これは高野山とか比叡でやっている修行とはまた違った、恐ろしいぐらいの、やっぱりすごさがあるんですね。どんな人が来られても、一番気を付けるのは、お客様に背中を向けないことです。それは、単なる失礼の問題ではなく、「いま触れ合っているのは仏さまの子なんだ」「その方々は用があって来たんだ」と、心の中で合掌するぐらいの気持が求められます。こういう素朴なものが、新宗教、特に法華系教団の中には流れているんだと思うんです。

で、私、一時、十四、五名の女の子を預かったことがあるんです。新入りが来ると、台所をやらせるんです。そうすると、必ず二日目ぐらいに湯呑みを割るんです。この処理を見ていると、おもしろいんですね。まず、先輩に相談する。「いいよ、いいよ」と言ってくれそうな人の所へ行ってあやまるというやり方をするんですね。私は割合にうるさいものだから、私のところにはなかなか来ないんです。そんな時、「大事な教団の湯呑を割ってしまって申しわけありませんでした。明日、同じものを弁償いたしますから、どうぞ許して下さい」言って来ます。そこで、これは教団の方針としてやる訓練なんですが、「どうして湯呑は割れたんですか」というと、「カウンターの端っこの方にありました」「湯呑は足があるんですか」「ありません」「だって今、あんた、湯呑がそこへ歩いて行ったみたいに言ったじゃない」「いえ、実は私が置きました」「手がちょっと触れれば落ちる所へ湯呑を置くということはあなたは、どういう心でやったんですか」「わかりません」「そうですか。じゃ、やかんにお湯わかして持ってらっしゃい」。持って来ますと、「手を出しなさい。湯をつぐから飲んでごらんなさい」といったら、「飲めません」「そうでしょう。たとえ縁が欠けていても、ヒビが少し入っていても、湯呑という仏様から頂戴した湯呑があれば、温かいお茶もお湯もいただける。これは大切にしなきゃいけないもんだということを思えば、まず、感謝というものがあるはず。感謝があれば、落ちそうな所に置くはずないじゃないか。あなたうちでもおそらくいろんな器物を割っているでしょう」「はい、割ってま

す」さらに「親兄弟に乱暴なこと言って人の心をこわしていませんか」、こういうふうに突っこんでいくわけです。高校を出た、十九、二十才の娘がみんなの見ている前でギュウギュウやられるわけです。で、その気持をつかんだら、「法華経にある懺悔ということをやってごらんなさい。懺悔とは、自分が気がついた悪い心を言葉に出して発露してあやまって見ることだ。うかつな心、感謝のない心、その他が出て、かわりに今度、間違わないよい心が入るのだから。そういうふうにやってごらんなさい」と話してあげる。これは会員の子弟だからというんでやるんですが、私がそれをやってみてびっくりしたのは、どのお嬢さんも正座をしまして、「〇〇、ただいまより懺悔をさしていただきます。私はこうこういう心で、貪ぼる心、欲張る心、いばる心、親をバカにする心がありました。それが今日湯呑をこわしたもとだということがよくわかりました。ありがとうございました」といって、涙を滝のように流して懺悔するんですね。そうすると、周りで見てる者がみんな拍手する。非常に気持ちのいい、なんていいますか、日常の中でそういう筋の通った修行をさせているんです。こういうことが、我々のところでは日常化しているわけです。

また別なことを紹介しますと、少年部の者を千人ほど預かって、ひと夏、千葉にある妙智会の聖地につれていったことがあるんです。早朝四時にたたき起こして朝夕のお勤め、法華経の抜粋、もちろん訓読ですけれど、それを四十五分間あげる。小学校二、三年の者が四時に起きて、四十五分間正座してお経あげるんですから、これはもう大変な苦役ですね。しかしこれをやってみて驚いたのは、これをやりとげた時の気持がどんなにすごいかということを、本人たちが覚えてしまう。その後、「やったあー」と言って、輝くような笑顔をみせる。「来年はどうだい。お経がなきゃ来るか」というと、「お経なきゃ来るけど、いや、お経あってもいいよ」という返事が返ってくる。

こういうふうに、だんだん変わってきます。子供達の甘えを遠慮しないでとってしまう。子供たちの魂はちゃんとそれを受けてくれる。しかも常に仏の慈悲を念じてやっていけば、必ず通じてくるんだということです。妙智会は、「懺悔」ということを非常に重要視します。我々は、小学校二、三年生から、「ありがとうございます」「すみません」

「はい」これを家庭の中で使おうという、いわゆるアスハ運動をすすめています。「これを実行すると、明日はもっといい人間になる」という教育ですね。

これは笑い話ですが、ある時、私が子供達を引率しながらタバコを道端の川の中に捨てたんです。そうしたら、小学校六年の子供が私のところに来て、「先生、今何捨てた」と言うから、「タバコの吸いガラだ」と言ったら、「どこへ捨てた」というから、「川の中だ」と言ったら、「いや、川じゃない。田んぼだ」と言うんですよ。「お百姓さんの入るところへ、そういう物を捨てていいのか」「そりゃいけないね。どうもごめんなさい。すみません」と言ったら、「みんなの前でやれ」と言われまして、二百人ほどの子供の前で、「お百姓さんの入る田んぼにタバコのすいがらをうかつに捨ててしまった。これは本当に申し訳ないことだ」とあやまった。しかもそういうことはいけないと教えている私がしたんだから、「どうか諸君、許していただきたい」と言って詫びたことがあるんですね。そうしましたら、女の子は涙をいっぱいためましてね、「男の子はいいぞーっ」、と拍手してくれる。これはもう、本当にすがすがしいなあと思いました。

これが実は新宗連に私が呼びかけて行なった、アジア懺悔行の原点なんです。原爆をはじめ、われわれは被害者意識ばかりが強いんですね。私たちの先輩や仲間達が、東南アジアへ出かけて行って、いかにたくさんの迷惑をかけて来ているかということをまず懺悔しなきゃいかんということで、単なる文化交流とか、平和使節でなくて、本当に「戦争中はすまなかった」とむこうの人と宗教的視点で話し合ってみよう。それで、タイの北部のタイメン鉄道で有名なナムトクというところへ行って、私たちは、タイ式の慰霊塔を建てて、懺悔の思いをこめてタイの僧侶と共に供養をしたのです。これは、妙智会がやっている懺悔ということを、全宗教団体に新宗連に加盟している方々に実行してもらおうというので、呼びかけたんです。日本人の墓地にもお参りしましたが、主として現地の犠牲者だけに慰霊を捧げて来ました。こういうアジア懺悔行きというものをやりました。これは十四年ぐらい前になります。

最後に一、二点申し上げたいのは、たしかに今もその教義・教理の整理は大変遅れ、低俗なやり方というふうに見受けられるものがありますが、それじゃあ、宗教に新も旧もあるものかという原点に帰ってみますと、私たちはいたずらに差別的なことを言うんでなくて、お互い学び合うことが必要ではありませんか。先日、私どもの新会長就任の祝賀会に金子日威管長貌下がいらして、こういう祝辞を述べています。「教団同士は対立することでなくて、お互い助け合い、研究し合い、手本とするところは手本とし、相親しみ、相交わって人類の幸せのために活動していかねばなりません。で、新会長は『一心欲見仏　不自惜身命』の大信念を持って会長に就任なったことだろう。お互いにこれから、いい所を学び合ってやっていこうじゃないか」と。とてもすばらしい言葉ですが、新宗連が掲げている宗教協力というのは、こういうことなのですね。問題は、その宗教協力をどういうところに求めていったらいいのかということです。教義や信条で言い合ったら、これはもうどうしようもないことですから。何か協力できるものはないかという模索を、新も旧もなくやっていかなきゃならない。テーマはすでにあるじゃないかと、私は言いたいんです。靖国の国家護持や公式参拝の問題にしろ、ここで協同戦線が張れなかったら、宗教界はまた悔いを千載に残す状態になるのじゃなかろうかと思います。今、妙智会も新宗連もそのことで非常に真剣になっているというのが実情です。これからの大変大きな問題として提起したいと思います。

それから、昭和三十年代にあるていど新宗教も陶汰され、生き残ってまいりました教団で、今、やはり布教の鎮静化といいますか、バイタリティーというものが衰えてきている。先日も、ある教団のある幹部に会いましたら、「実は私の所は困っているんだ、導きや広宣流布が進まない」というんです。「今の会長が万教同根、万の教えはみんな同じ根っこだから、○○会、○○会とやらんでもええじゃないかというような雰囲気」なんですという。佼成会の信仰やっても、妙智会の信仰やっても、あるいは身延へ行っても、あるいは天理教の信仰をやっても、信仰にはかわりないんだとこう言ってしまえば、それまでですけれども。私が日蓮宗のお坊さんに連れられて妙智会に行った。遠回りしな

がら、結局はそこへ行った。そこで三十数年間、法華経による先祖供養という道を一生懸命やってきた。で、元をたどったら、私の母親が七面山信仰をしておりまして、私が病気になると、南無妙法蓮華経と祈願してくれたことを思い出してみると、「ああ、やっぱり私はお題目を唱えなきゃいけない人間なのか」と思うんです。同様に、佼成会に入る人、天理教の信者になる方、あるいは妙智会の信者になる人、こういう人達は、前の世からのきまりでそういう者になっていくんじゃないかと思ったり、本日、私がここへ来たのも、前世からの宿縁というかここに行って話せよという仏様の呼びかけがあるんじゃないかというふうに感じているわけです。

私どもの方から、伝統教団にお願いしたいのは、僧侶の方に、もっと町へ出てほしいのです。あるいは門戸を開放して、私たちのマニュアルというか、いろんな方法をどんどん取り上げてもいいんじゃないかと思うんです。このことについて、こういうことがあったんです。私、両親を五十年代に続けて亡くした時に、故郷の真言宗の寺でございますが、中学の後輩が住職をやってまして、私、葬儀以来、何かと話すようになりましてね、法事の時には、「お坊さん、なにか話しなさい。でないとただの葬儀屋になってしまうよ」といって、いろんな資料を提供しました。そうしたら、法事の時、私の弟が住職にこういいました。「和尚さん、いままでどうしてこういういい話をしなかったんだ。せっかくみんな集まっているのに、布教のチャンスじゃないか」と。その和尚さんは、中学校の教師やってたんですが、「俺は間違ってた。やっぱり寺の復興やらなきゃいけねー」といって、英語の教師をやめましてね、今住職に専念しているんです。こういった姿勢を教える中に生かしていかなきゃいけないんじゃないか。それには街に出るという心がまえをまず持っていただかないとダメです。

それからもう一つ思うことは、お坊さんは若い時はご修行なさるけども、少し年とって来ると、怠けちゃうんじゃないかって気がするんですね。率直にいって。碁は打つわ、酒は飲むわ、マージャンはやるわ。ところが新宗教のわれわれはそれはできません。ご存知のように、信仰を語る者は、いつも周囲から見られています。後から見ても、横

から見てもこの方ならばという人格的なものが欠けては信者は絶対に話は聞いてくれませんから。ちかごろ宗教法人が税金問題などで非難されますが、宗教にたずさわる者は出家、在家を問わず、きびしい世間の批判に耐えられる自浄自戒が必要です。こういう点では、信者の目はヒステリックなくらいです。だから、いっていることとやっていることがちがっていたら教化の第一歩が進められません。上から横から、下からも年中チェックされている。したがって私、酒とタバコをやめました。やめざるをえないという状況に追いこまれたんですね。人様に欲望をセーブしろという話をする時に、酒を飲みタバコをのんでいたんではいけないんじゃないかという、素朴な反省からやめてしまったわけです。それくらいやめられなければ、仏の弟子だなんて大きなこと言えないんじゃないかなと、この歳になって考えたわけですね。

我々は、戦争中、弾圧された宗教の歴史を踏まえて、将来、どのように信教の自由を保持しつつ、自分たちの教えを広めていくかということに苦心していかなければならないと思うわけでございます。我々も、ただ座して食らっていますと、だんだんと布教活動が鎮静化し、活力が失われてまいります。基盤が弱くなる。だから日一日が非常な緊張状態にあるべきだと思います。ことに理事など役職が与えられますと、やはり責任を負わされ、非常にきびしい面が多々あるということでございます。これでお話を終らせて頂きます。

※本稿は、昭和六十二年五月二十九日、現宗研主催で行った、現代宗教研究セミナーにて講演されたものを筆録したものです。